

黑須紀一郎

Kurosui Kichirō

第三部 日本誕生

霸王不比筆



黑須記一郎

霸王
不比等
日本誕生



黒須紀一郎（くろす・きいちろう）

一九三二年、千葉県生まれ。

一九五五年、早稲田大学文学部卒業。日活株式会社入社。映像本部企画部長、テレビ本部企画部長を経て現在フリープロデューサー。著書に『元禄蘇民伝』（河出書房新社）、『天保蘇民伝』（作品社）。

はおうふひと
霸王不比等

第三部 日本誕生

一九九五年一月十五日 第一刷発行
一九九六年 六月二〇日 第二刷発行

著者 黒須紀一郎

発行者 和田 肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒〇三 電話 〇三 三二六二九七五三
FAX 〇三 三二六二九七五七
振替 〇〇一六〇三二七二八三

本文印刷 シナノ印刷

カバー・扉 栗田印刷

製本所 小泉製本

落・乱丁本はお取り替え致します
定価はカバーに表示してあります

目次

一	二上山の落日	9
二	多武峰奪還	52
三	血脈の儀式	111
四	浄御原令	135
五	権謀の幕開き	159

六 後宮工作……………185

七 異形の神……………213

八 禁書令……………254

九 日本誕生……………277

あとがき……………322

参考資料……………325

裝幀 || 菊地信義

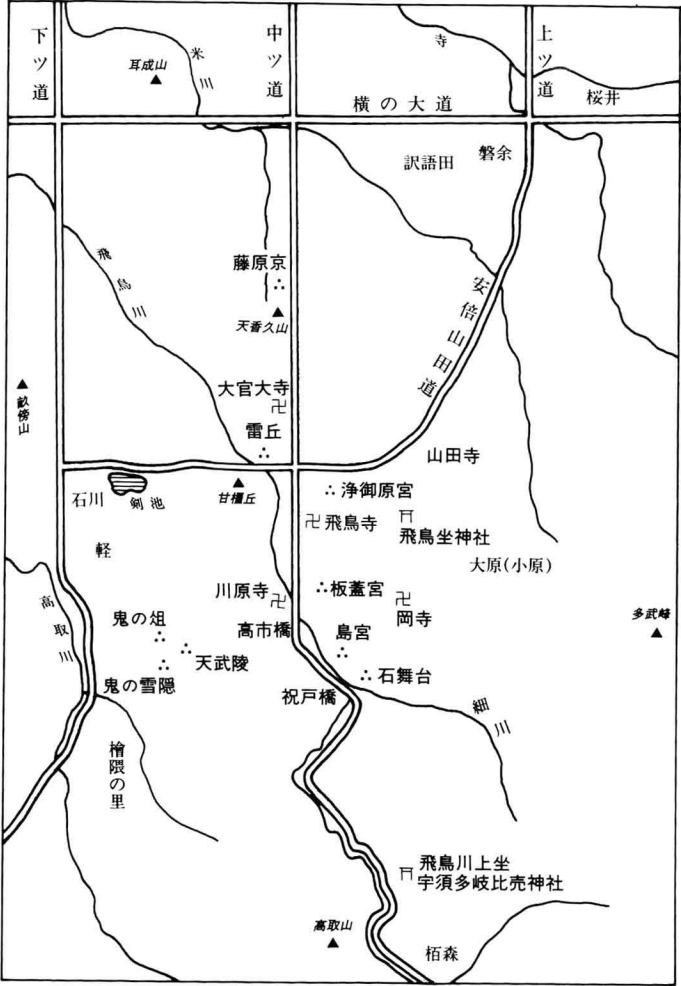
霸王 不平等

第三部

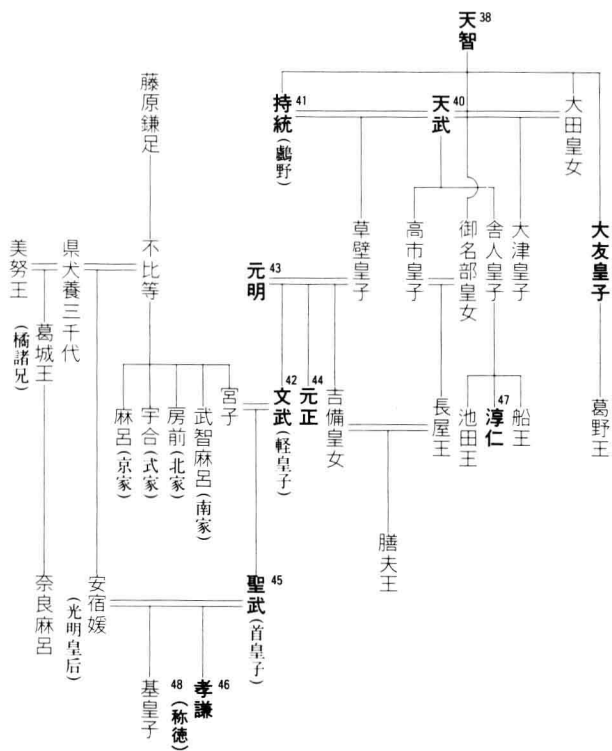
日本誕生

飛鳥周辺図

至 平城京



●天智から聖武までの天皇系図



〔右肩数字は書紀・
続紀による即位順〕

一 二上山の落日

1

飛鳥の山々も里も、秋たけなわであった。

すすきの穂が揺れ、黄ばみ始めた葦が、飛鳥川の水面に、同じ色の姿を逆さまに映している。
不比等は、ゆるやかに流れ下る舟の上から、前方に見える甘あま櫃かし丘や更にその先の天あめ香のか久山ぐやまに目をやっていた。丘も山も、所々を秋の色に染めて、舟から見る景色は、地上からのそれとはまた違った佇まいに見える。

不比等は二十八歳。

鼻下のづかにたくわえた髭と濃さを増した眉が、不比等に精悍さと落ち着きを加えている。

野面のづらをわたる風に混じって、読経よみぎやうの声があちこちから聞こえてくる。川原寺や飛鳥寺、そして浄御原宮きよみはらのみやの南庭に設けられた殯宮しやうみや（遺体の仮安置所）からのものであらう。

朱鳥元年（六八六）に崩じた天武大王の法要がいとなまれているのである。^{あかとり}

天武が崩じた二日後、鷗野^{うの}は殯宮で物忌^{ものいみ}に入り、官寺だけではなく、全国の諸寺に慰霊の法要を命じた。その読経の聲が、飛鳥の里に流れている。

不比等は、舟上から周囲に目をやった。

堤の道を行き交う人々も、田圃^{たんぼ}で収穫の後片付けをしている農夫たちも、屈託のない表情をしている。倭国の大王が崩じてても、彼らにはさほどの大事ではなさそうだ。

——お后さまがおられるから、心配することはない。

人々はそう思って、安心していいのかも知らない。

天武の生前から、都人の鷗野^{うの}にかける思いは、熱いものがあつた。飛鳥の人々にとってみれば、いくら大王となつても天武は鷗野の婿養子にしか見えなかった。だから、天武が死しても、国が乱れることはないと安心しているのだ。

——あの者たちのためにも、粟田真人^{あわだのまひと}に一働きしてもらわねばなるまい。

不比等は独りごちながら、ふと右に目をやると、舟はちょうど天香久山を過ぎるところであつた。

その北麓には、大津王子の住む訳語田宮^{おきだのみや}がある。

不比等の表情が、急に引き締まつた。

飛鳥川は北に流れて、大和川に合流する。

不比等に乗せた舟は大和川に入り、流れに沿って西へ進む。この川は西へ流れて、やがて難波なにわの海に注ぐ。

不比等が舟を利用して難波に来たのは、粟田真人を見送るためであった。

真人は急遽、筑紫の大宰に赴任することになった。緊急の大宰府長官である。任命は後の鷗野から出た。

天武が崩御して四、五日も経たない内に、容易ならざる報せが鷗野の耳に届いた。

「新羅の王子金霜林きんそうりんや重臣の金仁述きんにんじゆつらが倭国に向かった」

というのである。

——おかしい。

鷗野は直ちに不比等と呼んだ。

「弔使にしては早過ぎる。不比等はどう思うか」

鷗野は直感的に危機を感じたようであった。

不比等も同じ考えであった。

弔使なら、先ず倭国から天武の喪を告げる使いを出し、それを受けて弔使を派遣して来るのが慣わしなのである。事実、翌年（六八七）正月に、鷗野は、田中臣麻呂を使いとして、正式に新羅へ天武の崩御を報せている。

「二の宮から行心ぎんじんを通して、逐一報告が行っていたのです。ですから、新羅は帝の病状を知っていたのです。崩御なされたと聞いて、直ちに王子を送り込んでくるのは、明らかに倭国に対する

示威行為です」

「狙いは？」

「勿論、大津王子に関わることでありましょう」

「まだ新羅は、大津の大王位を諦めておらぬのか」

「おそらく」

「執念深い奴らじゃ」

鷗野が眉をひそめた。

「そろそろ根を断つ時が来たようでございます」

不比等も厳しい口調で応じた。

「判った。不比等、新羅の使節なる者を、絶対に難波津に入れてはならぬ。筑紫に止めおき、そこから新羅へ追い返せ」

「承知いたしました」

「おお、そうじゃ。今の^{おおみこともち}大宰では心許ない。誰ぞおらぬか。新羅の王子を相手に、堂々と渡り合える者は」

確かに鷗野の懸念は当たっていた。

今の大宰府長官は、天武が任命した路迹^{みちのとみ}見である。あまり信用できる男ではない。もし迹見が金霜林に丸めこまれて、難波への航行を許してしまえば、倭国で何をしでかすか判らない。今、倭国の政庁は、挙げて天武の喪に服している。しかも、まだ大王は決まっていない。後の鷗野が、

代わって称制しているだけである。言ってみれば、国中が隙だらけなのである。

絶対に難波津へ入れてはならない！

不比等も、同様の考えであった。

「私の学問所に、粟田真人という者がおります。人品学識共に申し分のない男でございます」
不比等は、真人を推薦した。

最初、不比等は自分が行く、と言った。しかし、それは鷗野が領かなかった。

「そなたは三千代と共に都に残り、わたしの手足となってもらわねばならぬ。まだ何が生ずるか判らぬ。三千代は島宮を、そなたはわたしの周囲から目を離してはならぬ」

そう言って、鷗野は不比等の申し出を拒否した。

不比等は次善の案として、真人の名を出したのである。真人は、不比等が飛鳥寺禅院の僧道昭しやうの許を離れて、葛城に学問所を構えた当初からの同志である。気心も知れている。しかも、その人となりには、不比等も畏敬の念を持っている。

不比等が見込んだ通り、後に粟田真人は遣唐使として唐に行くことになるのだが、その唐が真人を評して、

「好く経史（古典や歴史）を読み、属文（作詞や作文）を解す。容止（風貌と举措）、温雅おんがなり」

と言ったという記述が、中国の正史『旧唐書』に見える。最大級の賛辞である。

粟田真人は、鷗野から直接の目通りを許され、大宰府長官の辞令を受けて、今日難波津から筑紫に向けて旅立つことになったのである。

難波津で、真人は不比等の到着を待っていた。

「どのような不測の事態が起こらぬとも限らない。その場合は、直ちに使いをよこせ」
心配顔で言う不比等に、

「懸念にはおよばぬ。たとえ相手が新羅の大軍であろうと、決して筑紫から中へは一步も入れぬ。それより、貴公の方が心配だぞ。もしかすると、今度の金霜林の一件は、行心や二の宮の動きに連動しているかもしれぬ。川原寺と訳語田宮から、目を離さぬようにな」

「うむ、心得た」

「では……」

真人は、さわやかな笑顔を残して、船上の人となった。

不比等は、難波津の突堤に立って、船影が消えるまで見送っていた。

政治まつりごとに関わる者が激情に走れば、その適性を問われることになる。
そうだと判っていても、不比等は怒りを押さえることが出来ない。

原因は、二の宮大津王子にあった。

天武は生存中、何度となく大津の大王位継嗣を画策した。後の鷗野と王子たちを連れて吉野で会盟をしたのも、大津を日嗣王子ひつぎのみことするための工作であったし、大津の新羅留学、信州鬼無里きなきへの遷都計画も、すべては大津を大王位に就けるためのものであった。

——天武と新羅に操られて、かわいそうに。